

平成30年度第2回川崎市政策評価審査委員会 摘録

- 1 開催日時 平成31年2月27日（水）19時～20時10分
- 2 開催場所 川崎市役所第3庁舎5階 企画調整課会議室
- 3 出席者 委員 中井委員長、川崎副委員長、黒岩委員、米原委員
井上委員、長野委員、松本委員
事務局 総務企画局 唐仁原局長
総務企画局都市政策部 三田村部長
総務企画局都市政策部企画調整課 宮崎課長
総務企画局都市政策部企画調整課 中岡担当課長
総務企画局都市政策部企画調整課 蛭川担当課長
総務企画局都市政策部企画調整課
今村担当課長、井上担当係長、山田職員
- 4 議題1
(1) 政策評価審査委員会の審議結果を踏まえた今後の対応方針と市民意見募集結果について
- 5 議題2 その他
- 6 傍聴者 なし
- 7 会議内容

議題1 (1) 政策評価審査委員会の審議結果を踏まえた今後の対応方針と市民意見募集結果について

事務局から議題1 (1) に関連する資料2、資料3、資料4について説明

井上担当係長) 本日欠席の窪田委員、松井委員から事前に御意見をいただいている。窪田委員からは、施策4-7-4「市バス輸送サービスの充実」について、「市バスネットワークの再編に、本当に危機的な状況になる前の今のうちから取り組むのは良いことと思う。どうしても「安全」「利便」「コスト」の三つ巴になってしまうが、全体的に、前向きに取り組んでいるものと理解している」。施策3-3-5「多摩川の魅力を活かす総合的な取組の推進」について、「水辺の楽校は、良い取組だと感じている。その他、様々なイベントがあるが、継続するイベントと、やめるイベントの仕分けが必要なのではと感じた。イベントの開催が目的になってしまうようにするために、どこかのタイミングで効果を見ながらチェックしていくべき。イベントをある時期から開催しなくなっても、それまでの取組が無駄になるわけではない」という御意見をいただいた。松井委員は、この内容で了承したとのことであった。

米原委員) 質問だが、資料2の15ページの「ソーシャルデザインセンター」というのはど

ういう組織なのか。もう少し詳しく教えて欲しい。

今村担当課長) 平成31年3月末に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」を取りまとめる。地域包括ケアの推進や地域における関係の希薄化等への対応等の課題がある中で、どのように居場所づくりや地域の関係づくりを行っていくかというところである。中間支援組織みたいなものは多くの自治体で設置がされているが、従来の枠にとらわれず、誰もが気軽に集まれる居場所づくりや、色々な団体の連携づくり、コーディネーターから助言が受けられるような場を、行政が主体ではなくて、地域の方々を中心に作っていきたいと考えているところである。これらの仕組みを築き上げていくには、ハードルも高く、そう簡単なものではないということは認識している。平成31年度から、7区一斉にということではなく、徐々にできるところからやっっていこうと考えている。

米原委員) 具体的にどういう組織、どういう人たちが運営主体になっていくのか。

今村担当課長) どういうやり方がいいかというのは7区それぞれ地域の特性があると思うので、そういう中で、地域の方々とお話をしながら、どういう体制がいいか検討していきたい。色々な自治体の事例もあるので、それらも参考にしながら進めていきたいと考えている。

黒岩委員) 全体として、対応方針についてはこれでよいと思う。最近、川崎市の他の会議にも出させていただいて、その関連もあると思うので3点ほどコメントさせていただく。1点目は施策1-4-2「高齢者福祉サービスの充実」の成果指標⑤「介護人材の不足感」に関することだが、今回の対応方針はこれでよいと思うが、これから特に介護分野は外国人労働者が入ってくるというところで、そこで市が、その人たちを生活も含めてどう支援していくかということが出てくる。市の方向性が重要になり、今後の大きな課題だと思う。2点目はソーシャルデザインセンターについてだが、私も「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」について、地域包括ケアに関する会議で聞き、これは具体的に何だろうと思った。場づくりという意味で、とにかくやっっていくという方向性はわかる。一方で民生委員や地区社会福祉協議会、町内会・自治会がやっているサロン等があって、それとは違うものやっしていきたいということはわかるが、具体性が見えない。これもこれからの大きな課題だと思う。3点目は、児童支援コーディネーターについて、児童虐待が大きな社会問題になっており、川崎市としてどう対応していくのか、児童相談所がどういう体制になるのか等、話に出ていると思うが、児童支援コーディネーターが川崎の一つの資源として活用できるのではないかと思った。総括評価の審議で取り上げた施策は、これからの川崎市の大きな方向性に関わってくると思った。

中井委員) 委員会からの意見を受けて、所管局でそれぞれ対応についてお考えいただいているように私は理解した。この対応方針に従ってしっかり進めてもらいたい。

議題2 その他

中井委員) 第1期実施計画に関する外部評価として、委員会と部会をそれぞれ6回ずつ行ってきたが、全体を振り返って感じたこと、委員会や部会の進め方、部会でのプレゼンのやり方、事務局から事前説明等の方法なども含めて、委員の方からそれぞれ御意見、御感想をいただければと思う。その前に、本日欠席の窪田委員、松井委員から、事前に御意見、御感想をいただいているので、まずは事務局からその御報告をお願いしたい。

井上担当係長) 窪田委員からは、「部会で議論できる時間がもう少しあると良かった。事前レクするのであれば、当日の説明時間はもう少し短くしても良いと思った。やや表面的な議論に終わってしまったところがあると感じた。部会長としても、もう少し議論を促す進行ができればよかった」という御意見をいただいている。松井委員からは、「資料をあらかじめ送付し、事前説明はなしにして質問等はメールでやり取りするなど、柔軟な対応をしてもよいのではないか。部会当日の説明10分、審議20分というサイクルはちょうどよいと感じた。説明がもう少し長くなるかもしれないと思っていたが、比較的所管局の方は時間を守ってくれていた。評価手法については、指標を多く用いるなど、なるべく恣意的にならないようなシステムとして考えられており、洗練されていると感じた。基本的にこのまま継続でよいと思うが、「働き方改革」の流れの中で、いかにこの質をキープしながら進めていくのか。作成したパワーポイント資料については、それぞれの局が施策を紹介する広報に使う等、もっと別の場面でも活用してもらえると良いのではないかと思った」という御意見をいただいた。

井上委員) 諸統計については、今、社会問題として取り上げられているが、本評価審査も統計で内部評価されている。数多い中から選択された施策が市民に納得していただけるか。あるいは、ご理解いただけるかである。この他にも検討して欲しかった施策があったのではないかと思われた。もう1点は、外国人がかなり増えている。川崎市はオリンピックを好機として、観光振興施策にも取り組んでいるので、この施策をどのように取り上げるのであろうか。このことも今後の施策の課題かと思う。また、イベントに関する話題が出たので述べるが、花火は天気が悪ければ開催できず、その場合のダメージは大きい。東京と同時開催なのでどちらが主催なのか、市民以外の一般見物客はわかっていないと思われる。限られた予算の中で、市民のためのイベント等をどのように行うのか。まだ検討されていない多くの施策に含め、今後の課題としていただきたい。

長野委員) 色々議論させていただき、充実した活動だったと思う。事前説明を含めて、私もデータにこだわり、色々資料をお作りいただいたことは本当に感謝している。おかげでかなり理解を深めることができた。ただ、お話をしていると、いい意味でも悪い意味でも縦割りのところがあり、複数部署にまたがる問題等、横連携で解決するプロジェクト的な取組は、民間と比べて不足しているのではないかと思う。今回、部会の説明の際に、関係する課の方にも御同席いただくなど、努力もされていると思ったが、対応方針の中に、そういうところが入りきれていないと思い、そこは残

念に思う。施策を選ぶところについては、残念だった。どういう基準で施策を選ぶかというところが、クリアではない。これを審議してくださいということで事務局から案をいただいて、それをやるようなイメージを持っている。その時に委員から、審議をしたい施策がありますと、これをやってくださいという話をした。それに対してうまく取り入れられなかったという残念な部分もある。なぜそう言っているかという、私は、学童保育の質やキャパシティ等を議論してほしいと言った。それに対して色々と御意見をいただいたが、現に、私も一緒に運営している学童保育では、募集人員に対して2倍の申し込みがあり、断るような状況になっている。社会の変化は我々の考える以上のスピードで進んでいる。ニーズも変化している。わくわくだけでは捉えきれないようなニーズが出てきているということを知ってもらいたい。そういう背景を元に、この施策を審議してほしいという話をした。市民からの審議対象施策の案について、次は取り入れてもらいたい。

松本委員) 1つのテーマだが、色々な部署にまたがるが多く、それが横につながらなかったと感じることもあった。実際に私たちが生活している上で、課題、問題に思っていることが伝わらないこともあった。この委員会では、どうしても指標の数字で出てくるが、実際感じていることと食い違いがあることもあった。現実の生活の中で、話し合いたい点や、改善してもらいたい点等があると思うので、そこは委員の意見と折り合いをつけながら話し合っていけたらいいと思った。今盛んに、子ども食堂の話題や子どもの福祉に関する問題が取り上げられている。それぞれのボランティア団体が盛んに活動しているが、横の連絡を密にしていく必要がある。様々な団体が活動しており、方向性も目標もそれぞれ違っているので、そこを川崎市ならではのところで、うまくコーディネートできるような仕組みを作ってもらえると、もっと安全安心な生活につながっていくと思った。普段、私も施策のこんなに細かいところまで関心を持っていないので、この委員会を通じて、資料をたくさん見せていただいて、こんなに細かいところまで施策としてあるのだなと思った。総合計画を見てもそう思うが、こういうことをもっと、委員だけでなく、一般の市民の方達も関心を持てるようにした方が良いと思った。最近、広報誌もイラストを入れてすごく見やすくなってきたので、ずいぶん関心を持てるようになったが、もっともっと広く市民の方に伝わるような方法をとってもらえると良いと思った。民生委員の方や社会福祉協議会の委員の方もたくさんいるので、そういう方達を交えて、いろんな方達に情報が伝わるように、工夫が必要だと思った。

米原委員) 私は社会調査や指標、評価等が専門ということで、この委員会の委員を務めさせていただいており、川崎市の状況や、個々のテーマについては、あまり詳しくない状況で参加させていただいたが、色々なメンバーの方がおり、それぞれの持ち場というか、特技を活かして、各部会で議論ができたのはすごくよかったと思う。指標の立て方等、細かいことを色々と指摘させていただいたが、事務局には気持ちよく聞いていただいた。本日御説明いただいた、資料2や、資料3も見させていただいたが、指摘したことを真面目に聞いていただいていたのだなと感じた。先ほど井上

委員からお話があったが、最近エビデンスという話がすごく言われている。総務省の行政評価局もエビデンスが重要と言いつけて、今も言っているが、総務省が実施している東北管区の地方統一研修に、今年度、日本評価学会から講師として派遣されて行ってきた。今後もエビデンス重視の風潮は続くと思うが、総務省行政評価局もデータだけでは何も分からないということに気付いているように思われる。公共政策は、何か地域の中で大事にしたいことや生活の中で実現したい価値があり、それを何とか見たいので、それを数値化する。でも数値が見たいのではなく、数値の向こう側にある価値が見たいから数値化している。数値の向こう側にあるものが目的設定であったり、地域にとっての価値であったり、それをどう解釈するのかという解釈の部分であったりということだと思うが、そこがなくては意味がないということに、ようやく霞が関も気付き始めたという感じがしている。研修では、エビデンスとプログラム評価の考え方について講義をしたが、目的設定や価値設定の上に指標があるというアプローチも含めて両輪にならないといけないということで、行政評価局の統一地方研修で、プログラム評価の話をしてくれという話が来たのは、史上初めてである。まだ5年10年かかるかもしれないが、松本委員からお話があったように、地域の中での生活の状況を、市民の方に伝わるような解釈や説明を伴った形で共有するといったことが、評価に求められる時代になるのではないかと考えている。極端なことを言うようだが、ドラスティックに指標達成度のa、b、c、dの評価をやめてしまおうとか、そういう思い切った発想もあっていいかもしれないと心のどこかで思いながら、今後も色々と検討していただけたらと思う。そういう意味では、各担当課の方の評価能力の向上も必要である。市役所内部の人材育成や評価の研修をどのようにやっていくのかということも重要だと考えている。意味のある指標を各課が提案できるか等、内部での人材育成も視野に入れていく必要があると思う。

黒岩委員) 私の専門は社会福祉、それも地域福祉であるので、今回、米原委員と御一緒させていただいた部会では、指標の取り方や評価手法等について勉強させていただいた。どうしても専門分野ばかりになってしまい、自分も視野が狭くなってしまっているところがあるが、今回の委員会を通じて、私たちの生活を支えるあらゆる施策があって私たちの生活は成り立っているということを感じることができ、大変勉強になった。委員会の進め方等については、これまでに委員の皆さんから言っていたことと同じである。委員会で審議をしたことであるが、私も長野委員のように、自分が問題だと感じていることについて思いが強くなりがちであるものの、部会でどの施策を取り上げて、何を評価するのかということが一番重要なことだと思う。あれやりたいこれやりたいと言ってもダメだと思うが、生活目線のところは、施策を選定する上で、少し入れていただいてもいいと思った。もう1点は広報について、このような評価をやっていることや、総合計画もこんなに分厚いが、地域に出るとほとんど知られていない。市の広報紙もわかりやすくなって面白いと思うが、今回の市民募集意見は2件となっており、難しいものだと思われているのかもしれない

い。評価というと、悪く評価されてしまうと考えがちだが、良い評価というものもある。例えば、民生委員さんが、自分のやっていることに自信を持ってないというようなこともあるため、そういう時にプラスの評価をするなどして、評価されている、期待されているということ、地域の皆さんに返していくということも評価の意義ではないかと思う。そのように評価を市民にわかりやすくということも今後も考えていってほしい。

川崎委員) この評価システムは良くできていると思っている。かなりシステムティックであり、ルールに従うとこうなるということで、外部から文句をつけようがないという点で良くできていると思っている。ただ、米原委員がおっしゃったように、システムティックなところだけで評価が終わるのではなく、そこから先が重要だと考えている。このような計画があり、計画通り進んでいるとなっているけれども数字上は良くなっていない、職員は一生懸命やっているけれども、景気が良くなっていない等、そういうところを見つけ出し、その課題をどうやって解決していくかというところが一番重要である。評価というと学校の成績評価みたいなものをイメージされがちだが、健康診断ぐらいでいいのではないかと思っている。健康診断は、全部Aだけれど、気を付けなければいけないというように、良い数字が並んでいるけれど、気を付けなければいけないところを見つけることが、この評価の中では一番大事である。個々の部署はそこにエネルギーを投入してやっているが、トータルで考えるとこっちの方にエネルギーを投入しなければいけないということを見つける作業をこの評価の中でやらなければいけない。どこの自治体でもそうだが、職員数を増やせないといった事情の中で、どこにどう人を配置していくか、どういう政策に力点を置いていくかということをやっつけていかなければならぬので、このような横串で見ることができるメタ評価の中でそういうものがうまく見つけ出せるといいと思っている。これまでの部会では施策の達成状況がB評価、C評価のものを中心に見てきたが、指標の達成度はaが並んでいるのに、トータルでうまくいっていないというところを探し出すという作業がこれから課題になってくるのではと思っている。

中井委員) どうしても部会でヒアリングみたいなことをやると、担当課はディフェンドの方に回ってしまって、攻める側と守る側に分かれてしまう。難しいかもしれないが、私はもう少し、両方が対等の立場で、建設的な議論をするような場にしたいと思っていたが、なかなかそういう風にはならなかったということだと思う。その意味で、プレゼンの時間はあれくらいでいいと思うが、その後の議論の時間はもう少しとっていいのではと思う。委員の皆さんの御負担は増えるが、ある一日に集中させてしまって、もう少し時間を取りながらやっていくという形でもよいのではと思う。もう1つ、部会の場に、是非、他の課の方も参加をして、どんな議論が行われているのかを見ていただきたい。横串的なテーマで今回関係課に出席いただいたのはよかった。もう少しそれを進めていただいて、市の職員の方が忙しいのは理解しているが、それでも、1つの施策おおよそ30分程度なので、そういう場に出て議論さ

れていることを聞いてみようという職員の方には、その場に出席することを組織的に許していただいて、もう少し広い会場で色々な方が聞いている中で議論ができると、部会は良くなっていくのではと思った。まだ1回目、2回目ということで、議論がやや形式的だったのかなという気がする。2点目は、こういう評価は続けていただくことが大事だが、一方で、私も大学で評価をしたり評価をされたりする立場から言うと、評価疲れがある。書類を作るのも疲れるし、逆にそれを見てAとかBとか言っている方も疲れてしまう。しかも、毎年のように同じことをやっていると、どんどん形骸化してきてしまい、最初の何年間かはいいが、みんなが疲れるだけで、ちっとも全体が良くなれないというようなところに陥りがちである。そういうことが起きないように、時々評価の仕組みそのものを見直すなどしてもらいたい。部会でのプレゼンはそれなりの刺激のようなものにはなると思うので、続けていただくことが大事だと思うが、続けていただく中でマイナスの部分が増長することのないようにしてもらいたい。